

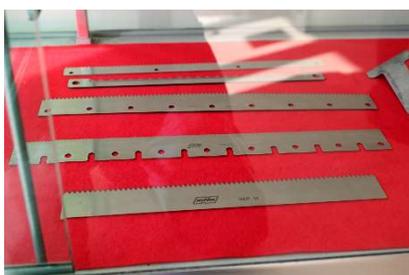
お客様がいるからこそ、成長できる。

世界を見据える刃物メーカーの努力

(この記事は『やくしん』2020年3月号に記載された「経営に生きる、経営に活かす(第三回)」の記事を転載しております。役職等は当時のものです。)

日本工業刃物株式会社・会長 あおきよしのり 青木義昇さん

創業以来、あらゆる産業機械用の刃物を製造してきた日本工業刃物株式会社。金属加工の社内一貫製造の実現や自社独自の標準規格刃物を開発するなど、業界でも攻めの姿勢を貫き成長を遂げてきた。今回は、同社の会長を務める青木義昇さんから、経営や事業推進のヒントを得る。



「行学二道」の教えが今日に続く



改良を重ね、お客様に喜ばれる刃物をつくる。

1947年(昭和22年)に東京都台東区で創業した日本工業刃物株式会社は、キャメル製造機の丸刃カッターと包装機械用ナイフの製造を手がける会社としてスタートした。現在は、工業用刃物のメーカーとして、あらゆる産業の機械用刃物の製造を行なう、創業七十年を超える老舗企業だ。青木義昇さんは、主に営業業務を行なう日本工業刃物株式会社と、製造部門・新日本工業刃物製作所の会長として、後進の育成にあたっている。

現在は、息子である康哲さんが同社の代表を務める。これまで、事業所の拡大や設備投資を行ないながら、確かな歴史を築いてきた。製造工場は、東京の浅草と小松川、千葉の松戸、さらに茨城県常総市に筑波工場があり、設備が充実している。営業部門もまた

東京、大阪、名古屋と主要都市に出張所がある。

青木さんが精力的に活動してきた原点には高校時代、佼成学園高等学校創立者である庭野日敬開祖からいただいたお言葉があるという。決して勉強ができる学生ではなかったという青木さん。そんな時に、朝礼で庭野開祖が生徒に話された「行学の二道に励み候べし」という言葉が青木さんの胸に響いた。「学」は学校や社会で学んだ知識や経験を、「行」は行動で示して実践することを指す。庭野開祖は、学ぶだけではなく行動に起こしてこそ、本当の学問だと生徒たちに説いた。「私にとって『行学二道』のお話は

非常に印象的で、目標をもって行動していきたいと思うようになりました」と青木さんは当時を振り返る。

庭野開祖の言葉を機に、優秀な同級生を目標にして勉強に励み、次第に力をつけていく。芝浦工業大学の金属工学科へと進学し、のちに日本工業刃物の顧問を引き受けてくれる恩師、石田求氏と出会った。長持ちするよい刃物は「熱処理の焼き入れ、焼き戻しといった工程をしっかりと行なうことができ初めてよいものとなる」と刃物づくりの心得を教えてくれた。青木さんは、庭野開祖と恩師の教えが重なったように感じ、教えや知見を家業で実践していくことを決意した。



茨城工場の入口には、導入第一号となる
研磨機が展示されている。

相手を思い、見えないところにも力を注ぐ

人と人とのつながりを最も大切にする青木さんは、相手にとってよい方法を常に考え、行動する。そんな姿勢は社内にも浸透し、至るところで垣間見ることができる。明るく気持ちのよい挨拶で出迎えてくれる社員。工場には、在庫の鋼材を分かりやすく色分けしている管理棚に、あらゆる種類の鋼材が並ぶ。いくつもの鋼材を常時揃えているのは、お客様への迅速な納期対応をするためだ。

また、働きやすい職場環境を整えることも怠らない。「自社の人たちが心地よく働くことができれば、高いパフォーマンスを発揮し、よい製品をつくることにもつながる。結果的に、お客様にも満足の



管理棚の色分けにより鋼材が判別しやすい。

ただけるものを届けられるのです。そのために働き心地をよくするのは重要」と青木さんは言う。取材した筑波工場には、事務員が十名、職人が二十名程勤務している。女性社員も多いのが印象的だ。子育てなどで勤務に制限がある場合は本人の力量を見極めながら、勤務時間を選択できるようにしている。さらに、職人も年齢を問わず積極的に採用している。筑波工場では77歳が最高齢だという。機械加工の経験者は貴重な人財であり、若手育成にもつながる。だから、体力や技術があれば大切な戦力として迎え入れている。営業部門でもまた、女性社員や高齢者が活躍している。東京本社では芝浦工大出身の七十代男性二名が、大阪と名古屋の出張所では立正佼成会の七十代壮年部員が一名ずつ、要職を担っている。臨機応変で前向きに会社に対応してくれることは、社員にとっては有り難い。

そして、青木さんはどのような場でも商売を全面に出さず、困ったときに相談相手になれるような人間関係の築き方を心がけている。これは社内でも変わらない。社員とは



台東区にある本社。

定期的にランチ時間を共有し、わずかな時間でも互いを理解し合う交流を大切にしてきた。明るい社内の雰囲気は、こうした積み重ねがあつてのことだろう。町工場から始まった日本工業刃物には、成長してもなお温かな人情が文化として残っている。

利益追求は会社の存続に不可欠だが、それ以上に青木さんはまず相手を思った行動が重要と捉えている。「お客様あつての私たちです。売上は結果であり、あとからついてくる。だから見えないところに力を入れています」。人にも環境整備にも労力を惜しまない。そんなところに七十年もの歴史を紡いでこられた所以があるのだろう。

創業百年に向け、世界への夢を次世代に託す

金属加工の世界は、歴史的に一つの町工場が一工程を担う分業で製品製造がなされてきた。それだけ職人が多く存在したということもある。しかし、技術力のある職人たちの高齢化や後継者不足により、廃業を余儀なくされる工場があるのが現状だ。日本工業刃物は、2017年に加工の工程にある焼き入れ作業を行なう熱処理設備（ソルトバス）を導入したことで社内での一貫製造を実現させた。同時に設備に精通した職人も迎えた。自社の目標も達成しながら、減少する町工場の技術や職人を絶やさぬよう、ものづくり

の環境を守ろうとしている。この前向きな経営が高く評価され、同年、東京商工会議所の第15回「勇気ある経営大賞」の奨励賞を受賞した。



ていねいに作業をする職人。

また自社独自で刃物の「標準規格品」を開発したのも、青木さんの大きな功績のひとつ。刃物の規格化により量産と従来のオーダーメイド刃物の半値近くで提供することを可能にした。構想から三年の歳月をかけ、営業、生産管理、工場各部門と議論を重ねて形にした。

「高品質で安価、短納期でお客様に届けることができる」と話す青木さんは、この規格化を強みとし

て国内にとどめず、世界に展開する構想を立てていた。「世界的な展示会に出展するなど当社の認知度向上に取り組んできましたが、私の時代では世界中に当社の刃物が周知される状況を達成できなかつた。しかし、刃物の規格化でその土台ができたと思う。創業百年に向け、世界に少しでも広まっていくことを願っています」と青木さんは語る。

刃物製造の小さな町工場は、時代の波に流されることなく確かな技術と常に積極的な姿勢で業界の地位を築き、全国規模の会社に成長を遂げた。青木さんの海外展開の目標は、次の世代に託した。70年以上の歴史を積み重ねてなお、世界を見据えて刃物業界を牽引しようと努力を続ける。「夢と目標を持って邁進していけば、結果はついてくると信じています。私たちの製品がお客様の喜びにつながり、そして社会貢献につながるよう行動していきたいと思います」と語る青木さん。日本工業刃物のさらなる成長から、目が離せない。



●あおき よしのり

松戸教会所属。明るい社会づくり運動松戸協議会会長。千葉県テニス協会会長。1942年東京都台東区生まれ。芝浦工業大学金属工学科卒業後、立正佼成会学林本科、教育課を経て、家業の日本工業刃物株式会社に入社。株式会社新日本工業刃物製作所と併せて取締役社長を務めたのち、現在は両社の会長として後生の育成に力を注ぐ。